

【新潟市租税教育推進協議会長賞】

「社会の「歯車」としての税」

新潟県立

新潟高等学校

二年 高杉 奈央

先日私が体調を崩したとき、病院で診察を受け、薬を処方してもらった。そのとき、診察代として払ったお金は五百三十円。しかも、処方された薬を受け取るときにはお金を払わなかった。調べてみると、日本では「こども医療費助成」という制度があり、各自自治体で、保険診療の自己負担額の助成が行われていることを知った。私はこのことに対して、お金の心配をせずに受診できることにありがたさを感じた。それと同時に、この制度を成り立たせるためにも、税金が使われていることに気付き、「税」は当たり前前の日常の中に溶け込んでいるものだと思った。この作文を書くにあたって、テーマは「税の意義と役割について考えたこと」だった。しかし、考えてみても、税の意義とは何か、という問いに対する明確な答えは思い浮かばなかった。それは税が目には見えないけれど、私たちの当たり前を支える「歯車」のような存在だからなのだ。と納得した。この「歯車」のおかげで、いざというときに救急車が呼べたり、気軽に図書館が利用できたりする。新型コロナウイルスのワクチンを無料で接種することができたのも、税の仕組みがあったからである。私たちは税金を支払うことで、この「歯車」を回すことに貢献でき、平等に安心した生活を享受できるのだと思った。高校生の私は、も

のを買うときに消費税という形で貢献している。今まで、税金は必要なものだと分かってはいても、役割を理解できていなかったため、消費税が十パーセントに上がるなんて、とすら思っていた。しかし今では、税に対する考え方が前向きなものに変わった気がする。

少子高齢化が進み、財政が圧迫されている今こそ、税についてもう一度考え直すべきではないだろうか。税金の使い道はさまざまであるが、子育て支援や介護支援など、今の社会に本当に必要な目的で使われることで、社会の「歯車」としての役割が果たせるのだと思う。そして何より、この歯車をうまく回せるかどうかは、私たち一人ひとりにかかっている。税の制度と税金の使われ方に関心を持ち続け、日常の当たり前にふと立ち止まって目をむけてみようと思う。